



12:13 さて、彼らはイエスのことばじりをとらえようとして、パリサイ人とヘロデ派の者を数人、イエスのところに遣わした。

12:14 その人たちはやって来てイエスに言った。「先生。私たちは、あなたが真実な方です。だれにも遠慮しない方だと知っております。人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教え、おられるからです。ところで、カエサルに税金を納めることは、律法になつていて、でしようか、いないでしようか。納めるべきでしようか、納めるべきでないでしようか。」

12:15 イエスは彼らの欺瞞を見抜いて言われた。「なぜわたしを試すのですか。デナリ銀貨を持って来て見せなさい。」

12:16 彼らが持って来ると、イエスは言われた。「これは、だれの肖像と銘ですか。」彼らは、「カエサルのです」と言った。

12:17 するとイエスは言われた。「カエサルのもものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」彼らはイエスのことばに驚嘆した。

12:18 また、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て質問した。

12:19 「先生、モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が死んで妻を後に残し、子を残さなかつた場合、その弟が兄嫁を妻にして、兄のために子孫を起さなければならぬ。』」

12:20 さて、七人の兄弟がいきました。長男が妻を迎えましたが、死んで子孫を残しませんでした。

12:21 次男が兄嫁を妻にしましたが、やはり死んで子孫を残しませんでした。三男も同様

でした。12:22 こうして、七人とも子孫を残しませんでした。最後に、その妻も死にました。

12:23 復活の際、彼らがよみがえるとき、彼女は彼らのうちのだれの妻になるのです。よ。うか。七人とも彼女を妻にしたのですか。」

12:24 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書も神の力も知らないのです、そのためにも思い違いをしているではありませんか。」

12:25 死人の中からよみがえるときには、人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。

12:26 死人がよみがえることについては、モーセの書にある柴の箇所、神がモーセにどう語られたか、あなたがたは読んでいないのですか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあります。

12:27 神は死んだ者の神ではなく、生きていける神です。あなたがたは大変な思い違いをしています。」

イエス様がもしもカイザルに税金を収める必要はないと言つたなら、彼らはイエス様をローマ帝国にはむかう者であるとして非難したでしよう。またもしもイエス様がカイザルに収めるべきだと言つたなら、ローマの支配を認める売国奴として非難されたでしよう。どちらに答えても敵はイエス様を訴えることのできたのです。

しかしイエス様は始めからこのように国との力関係や支配関係よりも、次元の高い存在であられました。つまり神の永遠の権威を持つた方です。「カイザルのものはカイザルに」というのは、この世のものとは違つたことと、私たちが時々、どちらに付くかなどという人間

関係の狭間で悩むところを果敢にまますが、このよいうに神のみこころの結果は神の権威によつてい

ます。また一方、信仰があるからといって、この世の義務を怠ることはできません。税金など課せられたことはそれを損なわれることはありません。神の国はこの世の目に見えらるるものとは違つて、サドカイ人は復活を否定してしまつたから、

イエス様を非難しようとした場合、復活にどうと死別した後に再婚しようかという質問をするところ、復活がないからこの意図すると、復活は、復活がないからこのモーセは再婚を認めようかという質問です。

イエス様はふたつの点で反論し、復活の正当性を説明されました。復活の後にはこの世の結婚を越える恵があるのだということです。もちろん結婚はすばらしいものですが、復活の栄光においては結婚を超える、永遠の関係が聖徒たちにあるからです。

また「アブラハムの神...である」というのは。死んだ人の神であることに関して、現在形で表現されているということから、今もアブラハムの神であり、そのアブラハムは消滅していません。

完全な神の知恵で復活を証しなさるイエス様の権威を信頼して、復活の希望を新たに持ちましよう。またその復活の希望と力で満たされて生きてましよう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）
②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？

④この世にあって何を実践しますか？